

第22回国立市文化芸術推進会議

1. 日 時 令和8年1月21日(水) 19:00～20:40
2. 場 所 国立市役所 3階 第1・2会議室
3. 出席者 (委員) 宇治議長、池田委員、森口委員、門倉委員、砂連尾委員、長島委員、
佐藤委員、仁平委員、間瀬委員、高橋委員
(欠席委員) なし
(事務局) 井田生涯学習課長、楠本社会教育・文化芸術係長
4. 傍聴者 0名
5. 議 事 (1) 開 会
(2) 文化芸術情報の一元的な発信について
(3) その他
(4) 事務局からの連絡事項
(5) 閉 会
6. 配布資料 資料22-1 文化芸術推進会議 分科会 中間報告
資料22-2 文化芸術推進会議 分科会 文化芸術情報サイトに関するヒアリング記録

7. 主な内容

(1) 開会

■事務局より、本日の配布資料の確認について説明を行った。

(2) 文化芸術情報の一元的な発信について

【宇治議長】 まず事務局から本日の会議の進め方について説明をお願いいたします。
【事務局】 本日の会議でございますけれども、次第の2といたしまして、文化芸術情報の一元的な発信について、これまでの間に分科会で検討してきた内容の中間報告を頂きます。その上で委員の皆様からの御意見を頂ければと存じます。

分科会では先行事例となります文化芸術情報サイトにつきましてヒアリングを行い、その上で先行事例を踏まえて検討を重ねていただきました。間瀬委員より中間報告を頂きまして、その内容について皆様に御意見を頂きますとともに、情報発信の主体となる組織等につきましても御議論いただければというふうに考えてございます。

本日の進め方につきましては以上となります。

【宇治議長】 それでは文化芸術情報の一元的な発信に関する分科会について、まずは中間報告を間瀬委員より頂ければと思います。お願いいたします。

【間瀬委員】 前回の議事のとおり、まず一つ、国立市の文化芸術情報の発信の一元化というのをしていくに当たって、お隣の立川市に立川ビルボードという、ポータルサイトとSNSの両方を使って文化芸術の一元的な情報発信しているサイトがあるので、これは国立で実施する参考になるのではないかとということで、具体的にここを運営している方々にお話を伺おうということで進めてまいりまして、

その報告をこの後にいたします。

また分科会のメンバーも募りまして、高橋委員や仁平委員にお集まりいただき、さらに前回の分科会では門倉委員も財団の方として御出席いただいております。

では、こちらの資料22-1の「文化芸術推進会議 分科会 中間報告」というペーパーを中心に、補助的に資料22-2の「ヒアリング記録」のほうを使いながらお話ししていけたらと思います。

中間報告の大きな1番「スケジュール・概要」ですけれども、表のとおり、本日が中間報告になりまして、その前に第1回から第4回の分科会がございました。その概要が(2)にございます。

第1回では立川ビルボードの運営者へのヒアリング項目を検討しました。第2回分科会が立川ビルボードの運営者の方へのヒアリングを行いました。第3回で、そのヒアリングの結果を受けて、国立ではどのようにしたらいいかということの枠組みを検討しました。サイトの形や、どういうものを取り扱うかということ以外に、それ自体を動かす組織ないしは人、あるいは予算が必要ですので、その主体をどこがやるのかということについて、立川の場合は立川の財団さんが関わっていることから、国立ではなくにたち文化・スポーツ振興財団の門倉さんの話を聞いたうえで議論しようということになりました。そして第4回に門倉委員を迎えて、ざっくばらんに議論させていただいた次第です。

では、次の大きな2番の「先行事例」、別紙参照とございますが、これが資料22-2に当たりまして、立川ビルボードというのが第1項、外見は皆さんも前回拝見したと思うんですけども、内情や仕組みについてヒアリングした記録というのが、資料22-2です。

まず資料22-2の1ページ目、10月7日に国立駅前プラザ会議室で行いまして、ヒアリング対象者は高木さんと稲福さんです。高木さんという方は民間の方ですけども、立川文化芸術のまちづくり協議会の方になっております。この立川ビルボードというサイトあるいはSNS周りをほぼほぼ1人で受け持っていていらっしゃる、実働もされているというような方になります。稲福さんというのが立川市の職員の方になります。

この立川文化芸術のまちづくり協議会が財団さんと市と、あと民間の会員の皆様で成り立っている協議会ということで、予算面や人の手当ての面も含めた話を聞きたいということで、国立市職員のお二人にも参加いただきまして、こちらからは分科会のメンバー全員が出席した次第になっております。

では続きまして、大きな1番の大見出し、「立川ビルボードの目的・概要」というのをヒアリングいたしました。丸のところだけ読んでいきます。

立川文化芸術のまちづくり協議会による文化芸術情報の収集・発信のためにスタートしました。

立川文化芸術のまちづくり協議会企画運営委員会というものが所管しています。ちなみに、この企画運営委員会以外に、立川の文化芸術団体にお金を助成、補助する委員会がもう一つあるということで、そちらではなく企画運営委員会のほうですよという意味になります。

続いての白丸ですけど、イベント情報の収集については、ポータルサイト「イマタマ」に各団体がイベント情報登録を行うことで、その情報が立川ビルボードに反映される仕組みと。これは補助線を引っ張ったほうがいいですね。この「イマタマ」というのは多摩地域のイベント情報がいっぱい載っているポータルサイトがあります。これは立川ビルボードとは別です。これには文化芸術以外の様々な多摩地域のイベント情報が集まってくるんですけど、それは取りに行くのではなくて、イベントを主催している方々がそのポータルサイトに、いついつこういうのをやりますよというのをフォームで入力すると登録が行えるんです。それが「イマタマ」というイベントサイトに掲載される仕組みになっている。だから、集めに行くのが大変なところを、これは主催者自らが登録してくれるので、そこ

を集めなくて手間がかからないというところでは、これが立川ビルボードと連携して、立川や立川周辺の文化芸術イベントに関しては「イマタマ」に掲載しているものを拾ってきて、自動的に立川ビルボードに掲載するというふうにして連携することによってイベント情報を収集しているのをコストよくやっているというような意味でございます。

続きましての白丸は、高木氏は2016年の立川ビルボードの、ポータルサイトはもともとあったんですけど、今の形になる改修というのが行われていまして、その段階から関わっていらっしゃるということです。

次のページに移ります。一番上に立川文化芸術のまちづくり協議会というのがどんな協議会かということ、ここに沿革といいますか経緯が書いてありますので、ここは後で読んでいただければと思います。省略いたします。

大きな2番の「立川ビルボードのねらい」ということで、ここも白丸のみを読み上げます。

デザイン面は文化芸術情報に特化していることが分かるデザインですよということです。

それからサイト認知度向上のための工夫を伺いまして、こういう工夫をしていますということが下にあります。

それから、どんなページが見られていますか、ユーザーが多く訪れる種類のページはどんな内容だったり、どういうページですかということをお伺いして、その下に書かれています。

それから大きな3番「市民ライターについて」と。立川ビルボードの記事、例えばアーティストさんの取材記事とか、アートイベントや文化イベントの記事とかというのは一部、先ほどお話ししたとおり、「イマタマ」に掲載しているものも載っているんですけども、より詳しいものだったりとか、取材系のものに関しては市民ライターさんが取材をして記事を書いていらっしゃるということで、この市民ライターについて伺いました。

1番目の白丸ですが、市民ライター養成講座というのをコロナ禍までの間には行っておりましたよということで、一般から募集して養成講座をして磨き上げを行うということをしたと。

それからコロナ禍後の展開というのがその次にございます。要はコロナ前とコロナ禍で、なかなか取材に行くのも大変だとか、人を集めるのも大変ということで、市民ライターの集め方とか育て方の体制が変化したということがこちらに載ってございます。

では、下のほうに行きまして、白丸の報酬についてです。市民ライターさんの報酬についてというのがその下にございます。

続いてめくります。大きな4番「コンテンツの管理について」です。編集に際しての留意点です。それから2番目が記事の構成（バランス）、掲載ノルマについてです。

続きまして、大きな5番の「イベントやアーティスト情報の収集について」ということで、これは「イマタマ」に掲載しているイベント以外の部分ですけど、1番目の白丸は「情報収集の方法」、続いて白丸2番目が「カフェや飲食店を取り上げる際の基準」と。こちらは文化芸術情報にどこまで何を入れるのかというのが立川ビルボードさんでもありまして、例えば市民ライターさんから、ここの飲食店を取り上げたいというリクエストが出たこともあるそうなんです。でも、飲食店は直接、文化芸術とは関係ないですよとなったときに、ただ、カフェはまだ文化的交流とかという観点とか、ギャラリーカフェがあったりとか、演奏などがついてくるような飲食店もあるかもしれませんが、そういった基準で、その場合は取り上げているそうです。ということで、そのあたりの微妙なラインというのをどうされていますかということをお伺いしました。あとは、アーティストを取り上げる際の基準もそう

ですね。どこまでのエリアのアーティストだったらいいんですかみたいなことだったりですね。

次に大きな6番の「技術面・運営面について」というところですけど、白丸のサイト構築を委託している業者はどちらですかというヒアリング。それから2番目の白丸、付加してよかった機能、こういう機能があってよかったなと思うのは何ですかということのを伺いました。

次のページに移りまして、連携しているサイトやSNSはありますか。特にSNSというのはポータルサイトだけではなく、どんなSNSを使って文化芸術情報をさらに拡散して発信していますかということのをヒアリングしました。

最後が「立川市の認識」ということで、その他の扱いになりますけれども、市としては、この立川ビルボードというものをどう捉えていますかということのを伺った次第です。

最後、大きな7番の「今後の展望について」で、白丸の1つ目は市広報紙、市ホームページ等の掲載でよりサイトの露出を高めていく。

2つ目、インスタグラムのフォロワー数アップ。ただし、アート分野のアカウントはなかなかフォロワーが伸びないため、リール動画等を活用していく必要があると。このリール動画というのはインスタグラム上のショート動画で、動いているもので目を引かせて情報に目を向けてもらうような行動です。

3番目が、立川文化芸術のまちづくり協議会全体としては自主財源確保が課題と。予算の面ですよね。地域の大学や企業を巻き込んだワークショップ等のイベントでは協賛金を募っているが、今後は個人協賛も受け入れるかを検討するというところでございます。

恐らく今述べました大見出し、小見出しというのは、当然ながら、国立市で同じように文化芸術情報のポータルサイトやSNSを活用していくに当たって、どうやって情報を集めているんだとか、どういう基準でやるんだとか、誰が書くんか、お金はどうするんだ、市はどう関わっているんだ、何が課題で、どういうところが人気で、そういった皆さんが恐らく気になさるであろうところを聞いてみたということで、その答えが書いてありますから、皆さんが国立を考えるに当たって、ここはどうしたらいいんだというところは一種答えといえますか、あくまで参考なので、まねする必要はないんですけれども、立川市さんのほうでは、こういう形で回答いただいているということがヒントになるのではないかとということでヒアリングさせていただきました。

では、こちらの中間報告のほうに戻ります。

大きな3番の「分科会での意見・検討内容」の(1)「一元的情報発信の枠組みについて」。これは前々からお話しさせていただいていますけど、立川ビルボードのようなポータルサイトとSNS発信を組み合わせて行いましょうということですね。

次の2つ目のポチですけども、ポータルサイトにアーティストバンクの役割を持たせ、一元的情報発信とアーティストバンクの2つを一体的に実施することを視野に入れると。これは文化芸術推進計画の中に一元的情報発信をやっていきましょうと。アーティストバンクを設置しましょうというようなことが書かれているので、それを同時にやろうと。それがポータルサイトの中で2つともが実現できるだろうということを視野に入れましょうということになっております。

(2)、今度は「サイトの運営主体」の話です。丸ポチ1つ目は情報発信の実施主体としては、発信情報の公平性の観点等から市ではない組織がふさわしいということです。

丸ポチ2つ目、一元的情報発信は文化芸術推進計画における新たな推進体制として、アーツカウシ的な組織が担うことが望ましいと。このあたりは計画の中には新たな推進体制もしくはアーツカ

ウンシルという言葉が入っているんですけども、市ではなくて、そういうところが一元的情報発信を担っていくのが望ましい。計画にもそのような形で位置づけられているということでございます。

3つ目の丸ポチがアーツカウンシルの事務局。アーツカウンシルの定義の一つである「助成を基軸として行政と一定の距離を置いて運営する」という点から考えると、立川市のように国立文化スポーツ振興財団（以下、財団）に事務局機能の一端を担ってもらうことも選択肢の一つではないか。これは一案でございます。この後、ほかの案も出てきます。

そしてアーツカウンシルについて、まずは一元的情報発信に限定してスタートしてはどうかということです。アーツカウンシルの役割というのは、情報発信以外にもアーティストと市民をつないでいくような活動、ないしアーティストとアーティストをつないでいくような活動とか、それ以外にも文化や芸術を振興していくような、文化芸術活動そのものをやるのではなく、やっている人たち、やっている中身を側面支援していくような役割というのが基本的にアーツカウンシルですので、そういったことが期待されているんですけど、国立ではまず手広くいきなり始めるのではなくて、一番弱いところであるところの一元的情報発信に限定してまずはスタートしたらどうかという意見になります。

裏面に行きます。丸ポチで、一元的な情報発信を行うだけであればアーツカウンシル設置は必須ではないのではないかということで、今度はアーツカウンシルがまずは一元的な情報発信だけやればどうかということに関しての先ほどの話で、そうであるならば、そもそもアーツカウンシルを設置までもなくてもいいんじゃないかということです。それはその下に理由が書いてありますけど、アーツカウンシルのような組織を設ける場合は、業務評価やそこで働く職員の労務管理等の運営コストも生じるため、組織設置の是非から検討する必要があるということになります。

今度はまたそれに対しての別意見といいますか、次の3つ目の丸ポチですけども、アーツカウンシル的な組織は小規模でも立ち上げて、そこを情報発信の実施主体とすることで、事業に説得力を与えられるのではないかということです。これ別に何か決まったわけではなくて組織を設置するということは予算もあるし、大変なところもありますよということでもめぐるところでございます。

4番目の丸ポチ、今度、これは門倉さんと呼んでのときの話ということですけども、財団としては現状の体制のままだとアーツカウンシルの事務局機能を担うことは難しい。人員も含めた予算確保が必要になる。人と予算（お金）、この2つが必要ですよということです。

次の丸ポチです。財団としては文化芸術情報発信の一元化を担うのであれば、併せて財団ホームページも充実させるなど、連動して財団の情報発信の強化につなげていきたい。

その次、市の進めるシティープロモーション。これまた違う話になります。国立市は今、シティープロモーションというものを新市長の下で進めていこうというような、具体的な中身はまだ伺ってないですけども、方向性があります。ここでいうシティープロモーションというのは人口増と関わってくる場所ですかね。特に現役世代の人口増を図るために、国立のまちをプロモーションして住んでもらう、働いてもらう、学んでもらう、学びに来てもらうみたいなことをやっていこうということがありますけども、そこが政策として進めていくのであれば、その中の一つに文化芸術も位置づける形でシティープロモーションを推進する実施主体というのがもしこれからつくられるのであれば、そこが、何て言うのですかね、部局的、何ですかね、下部でもいいですけど、言い方は。そこが文化芸術情報の発信を担うのはどうかというような、やはりどうしても人や予算の問題が出てくるときに、今、国立市がやろうとしていることにくっついてやるのはどうかみたいな形の案も出ているということでございます。

まとめまして、その下、一元的情報発信の主体として以下のいずれにするのはいかがとかがとことです。④がアーツカウンシル的な組織。国立文化スポーツ振興財団が事務局の一部を担うというものです。これは③に国立文化スポーツ振興財団と書いてあって、何が違うんだというふうに見えるかもしれませんが、あくまでも④はアーツカウンシル的な組織というのが独立して存在している状態で、それをサポートする形で文化スポーツ振興財団が事務局機能の一部を担うのがよいのではないのかというの④になります。これは割と立川の文化芸術のまちづくり協議会というのがそういう形になっているので、④というのは立川バージョンということになります。

そして⑧シティープロモーションの主体となる組織というのが先ほどお話したように、もし国立市がこれから力を入れていくシティープロモーションというものが予算もついて人もつけていけば、そこの中で位置づけながらやれるのかもしれないねという可能性の話として⑧です。

③は、これは独立した組織ではなくて、くにたち文化・スポーツ振興財団さんがやっていますというパターンです。財団の自主事業として、もちろんお金の面では市の補助を受けて実施するというものです。

一応、3案が上がっていますが、それ以外もちろん、皆さん、今日の御意見で、こんなのがやっていたらいいんじゃないかとあれば⑩も⑪もあっていいと思うんですけども、一旦、分科会のほうでは、この④⑧③が上がっている次第でございます。

(3)「イベント情報の収集」というところ。これが丸ポチ、多摩地域のイベント情報サイトの「イマタマ」のように各主催者がイベント情報を入力できる方法のほうが管理の手間が少ないということです。これは一つじゃないんですね。イベント情報は自分たちで探して、あるいは口コミなり、知っている中で集めてくることももちろんできますし、補助的に、こういうイベント情報サイトから引っ張ってくることもできるという言い方もできるかなと思います。二つに一つではないので、ここはあくまで自分たちで集めるだけじゃなくて、向こうから入力してくれるようなものもいいんじゃないかという提案になっております。

(4)は「編集部の業務と求められる人材」ということです。この編集部というのは、当然ながら記事を取材して執筆して、それをそのまま上げたらいいんですけども、直したりとか、実質、校正ですね。チェックみたいなものも必要になってきます。あるいは、どの順番にどこに取材してもらうとか、この記事はどのタイミングで上げようとかというようなこともありますので、ライターさんだけでは成り立たなくて、編集部というものが必要ですと。

その編集部というのは何をしますかということで①から③までございます。①が編集コンテンツの管理（紙面検討、取材依頼、校正、編集、アップロード、記事の公表・公開）ですね。②が市民ライターの募集・運営。募集し、育成し、依頼し、フォローアップをするなどのこと。①と②がポータルサイトのことですけども、③はSNSの投稿に関しては直接、編集部が行うと。市民ライターさんに任せるのではなく、そこは編集部でやっていくということです。

ここから下は丸ポチで、今度はいろいろ混ざって、編集部の業務だったり、求められる人材という(4)の見出しに関わる部分で、いろいろごちゃ混ぜになっていますが、読み上げていきます。

体制は立川ビルボードと同様の方式で考えてもよいのではないのか。

次の丸ポチ、①②は1人で担う。これは立川の場合は高木さんという方がやっていますが、高木さんのように1人で担い、③は別の担当者が担うのもよいのではないのか。全部やると1人では厳しいかもしれないので、③はSNSが得意な人というところに分けてやってもいいんじゃないかというこ

とです。

次の丸ポチですが、市民ライター養成にコストを割けない場合には、立川ビルボードのように誰でも参加というわけではなく、募集要項での書きぶりや面接時に足切りと書いてありますが、ちょっと言葉がきついで、フィルタリングとか、あるいは選考というふうに言い直してもいいですけども、選考を行うことも考えられる。これはすみません、「立川ビルボードのように誰でも参加というわけには」がどっちに係っているか分かりにくいんですけど、立川ビルボードさんは比較的「誰でも参加」のほうになっています。国立の場合はそうではなく、もうちょっと、より専門的な市民ライターさんになるような集め方のほうが育てたりとか、記事の内容が少しアマチュアの文章だなというところだと、どうしても編集者が校正、直しというのがすごい大変になってしまうので、そのコストをかけないようにするには、そもそもの募集段階でいろいろ工夫があるのではないのかということも考えられるということが書かれております。

続きましての丸ポチが、市民ライターの記事はまずは週1本ほどアップできればいいのではないかと。これは頻度ですね。どれぐらいのポータルサイトの情報発信の頻度があつたらよからうかということ、手始めは週1本ぐらいじゃないかというようなことで書かれております。

その次、情報発信（サイトと市民ライター運営）業務だけに限定すれば、人材は1から1.5人分の業務量だと思料するというので、これは事務局の機能、事務局というのは先ほどの労務管理とか社会保険がどうだとか、給料を払うとか、そういうことは置いておいて、ポータルサイトの記事を執筆・編集し、SNSを使って発信するというところに限って言えば、1から1.5人分の業務量だと思料するということになります。

次の丸ポチ、立川ビルボードにおける高木氏のようなコア人材としてウェブメディアの編集者経験のある人材が求められるということなんですけど、当然ながら、立川ビルボードさんは高木さんという非常に優秀な、この方は編集もできるし、コミュニケーション能力もあるし、SNSも触れると。マルチでできる方、こういう方がいないとなかなか、お金さえあっても難しいんじゃないかということで、こういう人材が求められますよと。これを今流の言葉で言えばウェブメディアですね。昔であれば雑誌の編集者とか、そういったものがあつたと思うんですけど、今どき、雑誌がなくなってウェブメディアというのが中心になってきているので、そういったところの編集経験のある方というのが募集してやることによって、先ほどの①から③の部分を担当するのではないかとということになります。

その次は、これは財団さんのリクエストですけど、財団が実施主体となる場合は財団広報も担当してもらいたいなということです。

その次、デスクで仕事をするというよりも町なかを回って情報収集するのが仕事になるイメージということで、市内にどういう文化芸術のリソース、これはアーティストだったり、場所だったり、イベントであつたり、そういったものを待っているだけで「イマタマ」のように集まってくるんだつたらいいんですけど、それだけではなく、恐らく自ら地域の文化芸術の動きを見ていかないと、町を回らないと、なかなか情報収集するのはできないだろうということで、デスクにずっと座っているというよりは、町なかを回りながら、その場でパソコンを開いて記事を編集したりという、結構ノマド的というんですか、遊牧民的な動きの形の仕事になるんじゃないかということがイメージされています。

最後、(5)の「予算について」。予算の全体像については、今後、アーツカウンシル的な組織と一体のものとして検討。その次、市民ライター記事を週1本程度アップするとなると年間52本となり、立川ビルボードと同様に記事1本当たり報酬総額を1万円とすると、報酬のみで年間52万円の予算

が必要だということになっています。これは市民ライターの部分の記事の予算のみの話になっていすけども。

以上です。私からの報告は一旦終わらせていただきます。

【宇治議長】 間瀬委員、ありがとうございました。

分科会のメンバーの皆様には本当にお忙しい中、このような形でまとめていただきまして、ありがとうございます。

分科会に御参加いただきました仁平委員、高橋委員より何か補足等々がございましたら、御意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

【仁平委員】 私は最初に分科会に参加したときに、こんなものは実現不可能なんじゃないかなと思いつつ、自分の興味本位で、この分科会に参加させていただきました。分科会で立川ビルボールの方のお話を伺ったり分科会の方々のお話を伺ったりする中で、国立市でも、こういう取組が実現できるということが分かり、とってもいい取組なので、自分にも何かできることがないかなと、これを実現できたときのメリットとかを考えてきたので、紹介させていただきます。

まず実現されたときの期待されるメリットや効果です。1つ目が市民やアーティスト双方の利便性の向上ということです。現在はばらばらになっている情報を集約することで情報の届きやすさが劇的に改善します。例えば町なかを回って情報収集する編集者の方が存在すると、小さな埋もれているギャラリーなどにも光が当たって、町全体が活性化される、活気が出てきます。

2つ目が、行政コストの最適化と専門性の確保ということです。アーツカウンシル的な組織が運営を担うことで、行政が直接行うよりも効果的かつ質の高い運営が可能になります。例えば民間の視点を入れたりすると、多様なジャンルの文化芸術を公平に扱うことができます。

3つ目は、シティプロモーションとしてのブランドの強化ということで、やはり文化芸術は国立市の強みであると思うので、そちらを市のブランドということで意識づけ、印象づけられるのではないかと思います。

そして最後4つ目は、財団さんとか既存の組織の機能を強化できるということです。例えば財団のホームページとポータルサイトが連動することで、財団が実施する自主事業での集客力や認知度も向上し、そういったノウハウが蓄積されていきます。

もう一つ逆に、取り組まないことによって機会損失することがあるということを考えてきました。

一つが、市民の文化的な豊かさの損失ということです。情報が埋没してしまうことで文化芸術事業を知ることができなくて、参加する機会を市民の方々が逃してしまうのがとってももったいないなということと、コミュニティ形成の停滞ということで、町の魅力を発信することが行われないことで、文化を通じた住民同士の新たなつながりや地域への愛着を育む機会が失われますということがあります。

2つ目はアーティストの活動拠点としての魅力が低下してしまうことです。素敵な才能をもつアーティストの方々が、立川市のほうがいいとあって、国立市からいなくなってしまうのは残念だなと思います。また、マッチング機会の欠如ということで、アーティストの方と仕事を依頼したい市民や企業をつなぐ仕組みがないため、地産地消の文化・経済のサイクルが生まれにくくなるということが考えられます。

3つ目が、行政組織運営の非効率性ということです。いろいろなところから発信することで広告コストが逆に多くかかってしまいます。それが一元化されることで、市全体で見れば非効率的な予算や

人員が一つにまとまります。

最後に4つ目ですが、文化のまち国立というブランドの相対的な低下ということです。せっかく文化芸術のまち国立なので、一元的な情報発信を持たないまましていると文化政策における都市間競争の遅れや、まちのブランドイメージの低下が考えられます。

これから先、恐らくこのことについていろいろな方に説明していくことが必要になってくると思うので、以上のようなことを伝えたいと考えました。

【宇治議長】 ありがとうございます。高橋委員のほうからはございますか。

【高橋委員】 すみません。今日は遅れて参りまして失礼いたしました。

分科会に参加させていただいて、今、仁平委員がすごく立派にまとめてくださったんですけど、私自身もやっぱり、国立というものの知名度の向上とか、住みたいまちとしての魅力を上げる。それからブランド力の向上のためには、ぜひ一元的な情報発信の拠点というのがあるべきだというふうな思いを強くいたしました。また先ほど御説明があったとおり、シティープロモーションというのが方向性として新しい市長が打ち出しているということで、それにも十分寄与する効果が出てくるものというふうに確信をしております。

やはり、ここにある予算については、例えば年間52本の、これは報酬だけでそのぐらいかかるといっていただけますけれども、誰がプロモーションをしていくかとか、そういったことで予算のかかることですし、それから立川ビルボードの話を伺えば伺うほど、あそこには高木さんというキーマンがいて、彼がいろいろな能力をお持ちで見事に運営されていると。そういった人を得ることも重要なんだなとすごく感じまして、その辺の難しさ、しっかりそういった人間が見つからないと難しいのかなという難しさはありますけれども、それを乗り越えてでも進めていくべきことだと思っております。

【宇治議長】 ありがとうございます。

立川ビルボードのヒアリングとその後の分科会の検討ということで御報告いただきましたが、本日はあくまで中間報告ですので、本日の議論を踏まえまして3月の推進会議に向けて、分科会でさらに調査・検討を行うことになると思います。

文化芸術情報の発信について分科会での検討内容、あるいは今後に向けて課題とか、お気づきの点がございましたら、委員の皆様から御意見を頂戴したいと思います。どなたか御意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。

ここでまた財団さんの話がいろいろ出たので、門倉委員のほうから何かお気づきの点とか御意見とかございましたら。

【門倉委員】 私は立川ビルボードのほうの高木さんとかの話は聞かなかったのですが、前回の分科会のところでお話をいろいろ聞かせていただいて、感想的には話をさせていただいたんですけど、以前からお話ししているとおり、情報の一元化というか、それには大賛成の立場ではいるんです。ただ、間瀬委員のほうから御紹介いただいたとおり、今の現状の体制ではということところは率直な意見として申し上げさせていただきました。

ノウハウを誰が担うんだというところがありますので、その選考の仕方ですとか、人材に心当たりがあるといった話であれば、ぜひそういう方向でと思うんですが、立川ビルボードのほうをもうちょっと詳しく知りたいなとかというのがあります。

あと、財団にはいろいろな財団があると思うんです。一般社団法人から、我々のような公益財団法人と言われるものがあるって、公益財団法人というのは公平というところでは言ったらおかしいんですが、

民業と公共みたいなところの差というのが僕のほうでもまだちょっと釈然としないところが実はありまして、どこまで情報発信できるのか、しなきゃいけないのかなとかといったところがあって、情報にどこまでが責任を持てるのかなというのが僕の心配事ではあるんです。

ただやっぱり、文化芸術というところで、指定管理を受けているところがありますし、市長が望まれるようなところで、国立をこういうまちにしていくな、そのためには文化芸術にもうちょっと力を入れていくなという話であれば、それなりの体制を整えていただければ、担うべきところということの一つの候補地としては、財団のほうでもとも思うんですけど、とにかくお金もかかりますし、取りまとめていくにも時間もかかるのかなと思うんですけど、なるべくスピーディーにということで、皆さんの御意見を聞きながら、よりよいものがもてできればいいなと思います。

さっき仁平委員から、要は立川ばかり独り勝ちみたいな感じになってしまって、国立から優秀な方だとかが流出してしまうとかという話。いや、ふざけて話をしているわけじゃないんですけども、やっぱり飲み行くんだったら立川ねという話なんで、みんな立川へ行っちゃうんですね。調べると、みんないいところは立川にいっぱいあるよと出ちゃうことがあるんですね。国立での地産地消という言葉が分かりやすかったんですけども、やっぱり国立といったところで、もっと魅力を発信していくのは前々から言われていることなので、その一端が担える仕組みとしては今やろうとしていること、進めようとしていることに賛成です。

課題がいっぱいありますので、今すぐに、はいと言って真っすぐに手を上げられないところはちょっとありますけど。

すみません。ちょっと漠然としていますけど。

【宇治議長】 ありがとうございます。

ほかに何か御意見とかがございましたら、いかがでございますでしょうか。どうぞ。

【森口委員】 森口です。2つ質問があります。

まず最初は、立川ビルボードのキーパーソンである高木さんという方は、何か本職が別にあって、これをやっていらっしゃるのか。これを本職としてやっていらっしゃるのではないようにも聞こえるので。そういう意味で、こういう方を見つけるのは、それなりにきちんとそれで所得が発生しないと難しかったりすると思うんで、そのあたりを御存じだったら伺いたい。

あともう一つの質問なんですけど、情報の一元化というのをつくるということと新たに情報をつくると。一元化というのは何か既にある情報を集めて一つの箱にするというイメージを私は持っていて、もう一つは新たな情報をつくるという仕事もあると思うんですけど、例えば市民ライターの養成というのは新しく自分たちでコンテンツをつくるという活動のように聞こえているんですけど。今回、国立で目指しているのはまず一元化だとすれば、既存の情報をまず集めることだけで、例えば市民ライターの養成まで行かなくても始められるのかとか。くにたちNAVIとかも時々見るんですけど、質の高い記事が載っているなど感じていて、例えばあれをここに持ってきたりして一元化するとオアシスとか、十分な情報があって、それなりに出発としてはそれでいいのか。そうじゃなくて、きちんと質の高い自分たちも取材するみたいなことを同時にしないとコンテンツが十分でないのかとか、そのあたりを教えていただければと思いました。

【宇治議長】 ありがとうございます。間瀬委員、お願いします。

【間瀬委員】 ごめんなさい。個人情報の観点から、後で高木さんにチェックを入れていただきたいので、高木さんがNGだったら切っ飛ばしてほしいんですけど。

まず高木さんという方がこれ単体で仕事をされているのか、ほかの仕事もされているかという答えですと、ほかの仕事もされている方です。そこがメインのお仕事ということになります。

資料2-2の3ページ目の丸ポチの「報酬について」の下にあるんですけども、立川ビルボードのちゃんとした取材記事というのは、そこに発生する費用は1万円なんです。そのうちの8,000円が高木さんの報酬です。編集者としての報酬です。残りの2,000円が市民ライターさんの取り分になっています。非常に市民ライターさんはボランティア価格でやっている。

この市民ライターさんは、その次の質問にも関わってくるところなんですけど、国立も立川も想定している市民ライターさんというのは、市民ライターさんが、例えば今度、アートイベントがやりますと。そこに行って、こういうことが行われました。実施報告型のものであれば、事前に今度、こういうやるのよというのを聞いて、先に行ってヒアリングして、こういう企画意図でこういうことをやっています、こういうことをやろうとしていますというのを取材するパターン。あるいはアーティストさんの取材記事みたいなものを行ってと。そのアーティストさんの取材記事というのが、森口さんが言う既存なのか新規なのかちょっと分かりづらいんですが、要はアーティストさんの取材というのは新規になるんですかね。

【森口委員】 新規ですね。

【間瀬委員】 そういうのもありますということです。ただ、そのアーティストさんをつくり出すわけじゃないので、既に存在している立川や立川周辺で活動している、あるいは立川に住んでいるアーティストさんがいるとなったときに、そこに行って、どういう活動をされていますかとかというのを伺って、それを記事にしているということです。

あとは例えば先ほどのギャラリーカフェとかギャラリーとかの情報も、ギャラリーさんに行って、どんな狙いでやっていますかとか、どういう方々が利用されていますかとか、どういう意図で企画していますかということを知って、それを記事にする形で、いわゆるいつどこでこういう内容ですというイベント系の情報は主催者側もチラシをつくったり何なりするから、それは受け取ればそれを手にするだけなんですけど、そうじゃない、もうちょっと深い情報というのは、そういう形でやっているということです。

高木さんは、この丸ポチ1つ目に書いてありますけど、8,000円というのは割合としては多いかもしれませんが、高木さんはかなりやっていることが多い。校正もやっていますし、取りまとめもやっていますし、どこを今度取材してほしいとか、そういうのも全部やっているということなので。

あとは、おっしゃったのは市民ライターさんの執筆のクオリティーが高ければ半々ぐらいでもいいんだけど、今の現状は、どうしてもかなり編集者としての直しというか、なるべく市民ライターさんの記事を立てて丁重に扱いつつも、そのまま出せない場合もあるので、そこで市民ライターとやり取りしながら直してもらったりとか、そういう行ったり来たりのコストというのでも発生していて、8,000円を頂いているけど、それでも仕事としては、ふだんはプロのそういう編集みたいなことをされているんですけど、それで見ても、あくまで有償ボランティアレベルの価格でやっていらっしゃいますということで、ほかの人が単独でこれをやれるか、同じ金額感でやれるかということと多分、国立の場合は難しいんじゃないかと。同じような高木さんのような方がいれば別ですけども、丸々本当にお願ひするんだったら、もうちょっと保障された月々幾らですみたいな形で、これは歩合になっていますけども、そうなるのかなと。

【森口委員】 固定給は受け取っていらっしゃらないということですね。

【間瀬委員】　　そうです。立川ビルボードに関しては歩合制で、しかも上限があるということですね。年間の協議会の立川ビルボード向けの予算というのが決まっているので、52本以上は書けないと。どんどん市民ライターさんがもっと書きたいとなっても、そもそもの予算の上限があって、無制限ではないですよということが立川の現状です。国立がどうするかは別ですけども、そうです。

両方のお答えになりましたか。2つの質問の答えに。

【森口委員】　　2つ目の質問としては、国立はどのような方針なのかというところをお伺いしたくて。立川については、コンテンツもつくっていらっしゃるということですね。

【間瀬委員】　　そうですね。もしくはイベント情報だけを転載するのかどうかというのを既存のというふうにおっしゃっている感じですか。

【森口委員】　　そうです。

【間瀬委員】　　ではなくて、これは僕の考えですけど、国立も立川同様に市民ライターさんがいて、アーティストさんの下に足を運ばれ、あるいはイベントに足を運び、ギャラリーに足を運び、いろいろヒアリングしてやる。くにたちNAVIというのを観光協会ではやっているんですけど、例えば飲食店で新しい飲食店ができると聞きに行き、どういう思いでやっていますかとかというふうに聞いて、いわゆる食ベログとかぐるナビとかに載っている、ああいうのじゃない、もうちょっと生のつくり手さん、お店の人の情報とか、メニューに対する思いとかも全部聞いて、そういう物語性の高いものを取材して書いて書いているんです。そういったものは国立版の文化芸術サイトでも必要なんじゃないかなというふうに私は思っています。

【森口委員】　　なるほど。くにたちNAVIの記事は質が高いと思って読んでいるんですけど、あれは市民ライターさんのような制度ではないと。

【間瀬委員】　　市民ライターさんの制度です。

【森口委員】　　そうですか。

【間瀬委員】　　うちは市民ライターさんになるべくクオリティーが高い人を選び、編集力が弱いです。逆に、立川さんは市民ライターさんの執筆能力が低いとは言わないですけど、高木さんの能力、編集者の能力が高くて、ライターさんの能力がちょっとアマチュアなのかもしれないですけど、観光協会のくにたちNAVIに関しては、そこが経験者とか、ほかで書いたことがある人とかというのをなるべく採用していて、編集能力はやや弱いかなというふうに私は思っています。これはあくまで自分の感覚でございます。

【森口委員】　　ありがとうございます。

【宇治議長】　　ありがとうございました。ほかに御意見とか何かございますか。

【間瀬委員】　　この間の分科会のヒアリングの際や門倉委員を交えてのときは、井田さんや楠本さんも参加されていたんで、行政としての御意見をもしよかったです。特に「立川市の認識」の話を僕はしなかったの。ヒアリング記録の最後のページの、これを実際やってみて、市としてどうでしたか、効果はありましたかというところまで聞いたんです。なので、そのあたりの報告は私の代わりにしてもらって、もしそれを受けて何か御感想があれば伺ってみたいなど思ったんですが。

【事務局】　　立川市の認識を聞いての事務局としての感想ですか。

【間瀬委員】　　そうです。先に立川市の認識を共有しましょう。その上で、もし何か感想があれば結構ですし、感想がなくても結構です。読まなかったの。この「立川市の認識」のところは。ここは大事なところだなと今振り返ってみて思いまして、僕が言えればいいんですけど、よかったら言っ

てください。

【事務局】 そうしましたら、まずはこちらの資料22-2の、今、間瀬委員から御紹介いただいた最後のページの丸の2つ目、「立川市の認識」というところの書いてあることの御報告を含めた説明なんですけれど。

まず立ち位置としては、立川市と立川文化芸術のまちづくり協議会との関係ですけども、立川市のほうから協議会さんに補助金の交付をしているというような、まずお金の面で言うと、そういった関係性であるというところになります。

そもそもの協議会の開設というのは、先ほどの同じ資料の2ページ目の冒頭のところに《参考》というところを書いてございますけれど、立川市文化芸術のまちづくり条例に基づいて設立をされているというような経緯でございます。

立川市の御担当の方のお話としては、やはり立川ビルボードの運営について市としてどのように思われていますかというようなこともお聞きしたんですけども、そうしたところ、やはりこの立川文化芸術のまちづくり協議会の事業としてでない、立川ビルボードというのは実現できなかった、市の自前でホームページを運営することはできなかったという認識でいらっしゃるという話を伺いました。私としては非常にその部分というのは印象的でした。

やはり情報収集や情報発信の上での公平性の部分のところは、どうしても行政だと縛りというところを意識してしまう一方で、立川ビルボードの柔軟な運営というところがあったので、市ではできない取り組みが可能になったというお話だったと認識しています。

それを受けてやはり文化振興への寄与効果という部分はかなりあると考えているということですか、市民ライターの制度についても、この立川ビルボードのために市民ライターの制度で市民を取り込んで、ほかの文化芸術事業のほうに市民ライターさんも結果として参加・協力するような波及効果というのも得られているといった点で、非常に効果が高いと考えているとおっしゃっておられました。

ただ、このあたりのところ、なかなか事業の効果測定といいますか、評価として定量評価が難しい部分でもありますので、どう評価していくのかは、効果があることは明言できるけども、それを定量的に示すのはなかなか難しいというお話だったと思います。

あとは、立川市のほうでの、この立川文化芸術のまちづくり協議会の事務局の業務について、その業務量の割合みたいなお話をお伺いしたところです。

報告と私の感想を交えての説明でした。

【事務局】 私のほうでは、特に近年、予算編成の時期に毎年苦勞するぐらい市の財政状況は厳しい状況になっていますので、費用がどのくらいかという点に特に着目して聞いていたところです。

記事を上げるところに関しましては、1本当たり1万円で、年間五十数本ということで上限があるにはあるんですけども、ただ、五十数本ということは掛ける1万しますと五十数万円の予算で運営しているというところで、その金額だけ考えれば、さほどでもないのかなと思うところなんですけれども、ただ一方で、こちらの「立川市の認識」の最後のポツのところにありますけれども、各職員の10%程度の業務量とはいえ、2名が関わっているところであったり、また先ほど申し上げた五十数万円の中にはホームページの立上げ費だったり、サーバー代なんかは入ってないということで聞いておりますので、確認は取ってないですけど、ホームページの立上げの経費だったり、そのあたりは気になるなと感じたところです。お金の話ばかりですけども、以上でございます。

【宇治議長】 はい、間瀬委員、よろしいですか。

【間瀬委員】 ありがとうございます。僕が振ったので、ありがとうございます。

【宇治議長】 ありがとうございます。ほかはよろしいでしょうか、何か。

あくまで中間報告ということでございますので、本日の議論を踏まえまして分科会にて再度御検討を進めていただいて、最終報告というような流れになってくると思いますので、この場でもし何か御質問等や御意見があればお伝えいただければと思いますが、よろしいでしょうか。

【門倉委員】 ちょっといいですか。確認ごとみたいな感じになっちゃうんですけど。

今の立川市さんのほうの認識といったところで回答いただいたんですけど、2つ目のポチのところをもうちょっと詳しく教えてもらいたいなと思ったんですけど。

協議会の実施事業としてでないとできなかった、市の直営だと厳しかったらろうというのは、人の問題なのか、質の問題なのか、何の問題なのかなというのがちょっとよく分からなかったんですけど。

この高木さんという方が個人名で出ていますけど、クオリティーの高い方を市で雇えたりすればということであれば、運営の主体自体を市の中の組織の一つ組み込んだりみたいなことができるんじゃないかなと。これは僕が勝手に思っただけなんですけど。立川市が、この協議会のほうに任せなかったら、多分、市だけではできなかったというのは、もうちょっと詳しく教えてもらいたいなと。

【事務局】 事務局から補足で御説明させていただきます。

ここの市の直営で自前での運営できなかったというのは幾つか要素がありまして、一つは、先ほど来話している発信する情報の公平性の問題というのが一つあると思います。

もう一つ、人材とおっしゃった部分、要は立川ビルボードの統括をされている高木さんに関しては、これは先ほど間瀬委員の御説明の中にもあったんですけど、立川文化芸術のまちづくり協議会の企画運営委員さん、企画運営委員会の副委員長さんでいらっしゃるという形になっています。これも御質問にありましたが、本業を持たれているという方です。御自身の会社で本業を持たれていて、そういった背景がありつつ、企画運営委員のほうにも参画をされている委員さんでいらっしゃるということになります。高木さんだけではなく企画運営委員会の皆さんは、立川市内の文化芸術に関する領域の方々が委員さんとして参画をされているということになりますので、一つは人材の確保というところでおっしゃったようなことに関しますと、こういった文化芸術のまちづくり協議会という枠組みがあったので、そういった人材の方が企画運営委員として参画してくださっていて、その方とタッグを組むことができたという面があるということ。

あとそれから、情報の収集ですとか発信というところでいったときに、企画運営委員の皆さん自身がアート、文化芸術の領域に関するお一人お一人がその領域の方でいらっしゃるの、そういったところでの情報収集のための連携というところでも、市は人事異動があったりとかして、なかなかそういったネットワークが途切れてしまったりということが起こりがちな組織では、そういったことはやはり難しかったろうと。そういうような意味合いも含まれているというふうに私はお聞きして感じたところです。

今の御質問に対して細かく御説明すると、そういったところかなと思います。

【門倉委員】 ありがとうございます。

何か物事を動かしたり運営していく上では、ある程度、能力的なものを持っている方が、そこに運用しないと……。時間をかければ研修だとかということで、だんだん能力的には上がっていくことはあるかもしれないんですけど、やっぱり適材適所というか、得意不得意みたいなところがあるので、一つは立川にはそういう土台みたいなものがあって、そこに乗っかることもできたということが

最大のところだということなんです。

立川市が始めから、そこら辺を企画して立ち上げようかなと思ったら、今みたいにやるのは難しかったかもしれないけどという意味合いもあると。

【事務局】 そうですね。もともと文化芸術のまちづくり協議会という器があったというところが大きいかなと。これは私の感想ですが、そう思っています。

【門倉委員】 分かりました。ありがとうございます。

【宇治議長】 ありがとうございます。そのほかはよろしいでしょうか。

それでは、本日の議論を踏まえまして、また大変お忙しい中ですが、分科会では再度検討を進めいただければと思います。

それでは、次第の3、その他でございます。

各委員の皆様より近況や情報提供など、この場で共有したいことがございましたら、いかがでございますでしょうか。御意見等々、何か御報告あれば、よろしいでしょうか。

【間瀬委員】 ごめんなさい。これは聞いていいのか。来年度の文化芸術予算に関して何かあったりしますかという、ざっくりの質問です。推進会議も含めていいんですけど、推進会議以外で特徴的なことだったりとか、あるいは増えた減ったでもいいんですけど、聞けることで。

【事務局】 実はもう少しすると予算案についてお話しできるタイミングが来るのですが、申し訳ないのですが、現時点で来年度予算の概要自体をお伝えできないということで、もう少しお待ちいただければなど。

【間瀬委員】 3月の最終報告のときには伺えるとかですかね。

【事務局】 少なくとも次回の会議の段階では確実にお話しできる段階には入っていると思います。

【間瀬委員】 かしこまりました。ありがとうございます。

【宇治議長】 ほかは何か御報告等々はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本日の審議はこの程度にとどめまして、最後に事務局からの連絡事項ということで、事務局から連絡事項をお願いいたします。

【事務局】 次回の文化芸術推進会議の日程につきまして御連絡させていただければと思います。

先日、メールにて御連絡させていただきましたとおり、次回の会議につきましては3月17日の火曜日、お時間は同様に19時からで、場所も本日と同様の国立市役所の3階のこちらの第1・第2会議室となります。また、こちらの今御議論いただいた内容の最終報告ということでございまして、また来年度の予算ということも予定してございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、この後、分科会の委員の皆様におかれまして、次回分科会の日程調整をさせていただければと思います。2月に開催できればと思っておりますので、この後少々お残りいただけますと幸いです。また、これまで分科会のほうに御参加されてこなかった委員の方でも、次回、参加したいというご意向がありましたら、この場にお残りいただけますと幸いです。

【事務局】 実は予定していた時間より若干早い部分もございまして、今日、特に御発言いただけてない委員さんもいらっしゃるの、先ほどの議題に戻ってもいいんですけど、皆さんも本当に大丈夫でしょうかという確認です。

【宇治議長】 どうでしょうか。では、砂連尾委員、よろしく申し上げます。

【砂連尾委員】 まずは分科会の皆さん、ありがとうございます。非常に感謝しています。

私もこういうのがあったらいいだろうなとすごく思いながらも、自分もアート分野に特化してい

る中で。ただ何か、今、森口委員から、くにたちNAV Iが結構いいと。ふだんは見ないんですけど、今見てみたら、確かにこれはすごいいいなと。これと今度やろうと思っているものというのは、先ほど言われたように、もう少し市民のアート関係での交流というか、そこで質問したりというような、そういうものが加わるという認識でいいのかと。あとはやっぱり、情報なんかを発信するのは……。

あと、この高木さんのモチベーションは一体どこから来て、こういうことをやろうと思えたのかなというのとはすごく……。これほどの価格で。高木さんご自身も立川市に対する愛着がすごくお持ちの方なのかというか。私はまだここに越して来て8年目で、どちらかというに関西が長かった人間です。そうになったときに、こういう会議で国立のことを一生懸命考えようかなと思いつつも……。

多分、今回の情報発信するというのとは、そこに一つの視点や何か考えというものがすごく反映されていったときの公平性とかというのは一体どういうふうに向って行くものなのかということとは聞きながら考えている最中ではあるんですけど、その辺はもしよろしかったら、間瀬委員でも、いろいろ交流をされていることでしょうか、まずはこういうことを提案された方だと思うので聞いてみたいのが、くにたちNAV Iとの違いと、あと高木さんのモチベーションに関する事と、そこにおける情報を発信するというのとは、それは絶対いいことだと思うんですけど、その点に関する何か視点があるということは、その人の考え方が当たり前のようについてくるものだと思いますけど、その辺はどういうふうに関わってくるというか、考えていらっしゃるか、ちょっと聞いてみたいかなと思います。

【間瀬委員】 よろしいですか。

【宇治議長】 間瀬委員、お願いします。

【間瀬委員】 1番目、くにたちNAV Iとの関係性においてと。前に図示したビジュアルの資料をお配りしたことがあったんですけど、くにたちNAV Iというのは一応、観光情報サイトと銘打っていて、ただし、市外の人も市内の人に向けてもつづけています。どっちかがターゲットというわけではなくて両方です。

観光まちづくり協会が町の振興課の下でやっているものです。まちの振興課という課があるんです。生涯学習課のように。そうすると、どうしても産業とか祭りとか、そういったものが中心になります。文化芸術も来れば扱うけれども、そこが中心では全くない。ちょっと弱い。飲食店とか、お店とか、商店街のイベントとか、大学通りの天下一とか、LINKくにたちとか、そういうものは取り上げがちなんですけど、文化芸術はやや弱いかかなと思っています。あとは生涯学習情報、学び系ですよ。国立は文教地区、文教都市と言われているぐらいですけど、公民館とか、様々なところで行われている生涯学習、学びの情報、そういったところも実は弱い。あと、市民活動みたいなものも弱い。このあたりは全て、市の中で計画で、そこら辺は情報発信一元化が必要だよと各計画で言われているところだったり、議会で議員さんが地域活動や市民活動の情報発信が必要じゃないのかという質問が飛んだりとかとあるぐらい、くにたちNAV Iは存在していても弱い部分が幾つかあって、そこはやはり問題視されている、課題視されていると。

そこで今回は文化芸術に関しては、ここは生涯学習情報も含めたりとか、地域活動を入れたらいいと実は僕は思っているんですけど、そういったまだ一元化が弱い部分の専門サイトをつくるべきだという感覚です。立川ビルボードもそうです。立川ビルボードは飲食店とかお祭りの情報は載ってなくて、文化芸術とか、そういうものに絞ったものが載っています。専門誌という言い方をしました。雑誌の総合誌と専門誌でいうと専門誌みたいなものが必要だと思っています。

ただ一工夫として、技術的な話は一旦置いておきますが、国立版立川ビルボードみたいなものがで

きたときに、そこに文化芸術の情報を載せたとします。それがくにたちNAVIにも自動的に配信される仕組み、一々こっちにももう一回投稿する必要がなくて、一個、ビルボードのほうに投稿さえすれば、NAVIにも投稿したいよというチェックを入れるだけでNAVIにも自動的に配信されるといいなというふうに考えているんです。ただ、こっちは総合誌の役割、こっちは専門誌の役割と。一石二鳥で情報が飛ぶという仕組みが実現できたらいいなと考えています。

次が2番目の話なんですけど、3番目がちょっと1番目とつながるんですが、一旦2番目の話で、高木さんのモチベーションは高木さんしか分からないので答えられませんけども、僕は観光まちづくり協会の副理事長をやっていますけど、理事報酬も何もなく、ゼロ円です。もう8年か10年かやっていますけど大変です。時間を取られますし。でも、そういう人もいらっしゃるのかなと。市民ライターさんも2,000円で記事を書いているわけですから、普通のライターだったらあり得ない額なんですけど。なので、さすがにゼロ円というのはないなと僕も個人的には思っていますけども、ある程度のモチベーションと若干のお小遣いととかということによって成り立つ部分はあるのかなと。そこが自分が住んでいたり、活動していたりすると盛り上がるといういいなとか、あるいは、それをきっかけにいろいろな人とつながる。当然、編集とかライターとかということ、いろいろライター同士のつながりだったり、店の人と顔なじみになったりとかということもある。お金だけには代えられないメリットと、地域を盛り上げている一翼を担っているよという気持ちにもなるでしょうしということがモチベーションなのではないかと。いや、もっとすごく実はビジネスに跳ね返る何かがあるのかもしれないけど、そこは高木さんではないので私は分かりませんが、僕個人に置き換えてみると、そういうところがあるかなというふうには思いました。

3番目の公平性みたいな部分の話なんですけど、これは僕個人の意見です。もしビルボードみたいなものができたときに、どういう情報発信をすべきかなと思ったときに、僕はここの最初のヒアリングでも聞いたんですけど、どんな情報が見られますかというのを聞いたんです。そこがポイントで、多分、すごく見られる情報というものを意識的に選んで流すべきだと僕は思っています。そして、それを見に行ったらサイドに関連情報として小さいものを扱うというふうにするのが賢いやり方かなと思っています。全部が小粒なものを載せても、あまりみんな興味なくて見ないなみたいなサイトになってしまうので、みんなが食いつく情報をしっかり意識的にどんどん発信しながら、その周りに関連ニュースとか、目に入ってくる形で小粒なものも入れていくというようなことによって、実はそういったふだんだと埋没したりとか、目に触れられない、今までは小さく発信していた情報も目にももらえるのかなというふうに僕は思っているんで、全部同じぐらいの温度感で取り上げるというやり方は、それは一見、公平に見えても効果が薄いんじゃないかと思っています。実は結構、効果重視で進めるべきじゃないかなというふうには個人としては思っています。それが公平性かどうかは置いておいても、効果的ではあると認識しています。

【宇治議長】 どうぞ。

【砂連尾委員】 なので、今の間瀬委員の話は本当にある意味で編集長的な視点で、間瀬委員が国立の文化芸術のサイトを立ち上げた際には、そういう編集長的な役割をやられたらいいんじゃないかなと僕は個人的には思います。そこまでの視点や、ほかとの比較対照もできていますし、何より間瀬委員は以前、私がここでワークショップをやったときも見に来てくれた方でもあったので、そういう方は国立に間瀬委員以外で、そういう問題意識を持ってやられている方はいらっしゃるんですか。

【間瀬委員】 僕が問題意識を持っているのは情報発信という部分の問題意識が強いんです。僕は

文化芸術に関しては、映画というジャンルに関してはめちゃくちゃ詳しいんですけど、それ以外に関してはもう一切詳しくないと。興味がなかったりもあつたりします。なので、その部分では弱いと思っているんですね。あるいは、いろいろなジャンルがあるじゃないですか。踊りとか演劇とか音楽とか彫刻とか、様々な芸術の種類はあって、その全部を一人で賄えるほどのものではないので、やはりその部分というのは財団さんの学芸員の方とか、そういう人もいるんでしょうから、ある程度集めるとか編集するという視点においては、もうちょっと頭数が必要なのかなと。協議会も協議会でそれだけいろいろなジャンルの方々が集まって話をされているので。ただ、実務面では編集長みたいな人が一人いて、その人が現場を引っ張っていきべきだとは思いますが。そういうのが僕の考えです。僕が編集長にふさわしいかどうか、ほかのふさわしい人がいればやっていただくのが一番だなというふうに思っています、個人的には。

【砂連尾委員】 ありがとうございます。

【宇治議長】 池田委員は？

【池田委員】 特にないです。

【宇治議長】 大丈夫ですか。佐藤委員はいかがですか。

【佐藤委員】 立川ビルボード国立版は全然すばらしいと思います。さっき市民ライターさんの話があったと思うんですけど、市民ライターさんを育成して、あるレベルまで持っていくのは大変な苦勞が要るんだと思って、それを否定しているわけでは全然ないんですけど、よくインフルエンサーという方がいらっしゃると思うんです。企業なんかでは、フォロワー数とかで1人に付き1円とかと契約してやっていると思うんですけど、そこまで行かなくても、国立市内である程度フォロワー数がいって、どんな方がいるかは分からないんですけど、発信の元になるような方がいたら、どうやって契約すかも分からないんですけど、お願いして、そういうアプローチをしてもいいんじゃないかと思いました。

もう一つは、このデータベースができた暁にだと思んですけど、各アートのそれぞれの個人なり団体さんが横のつながりというか、なかなかクリックしてつながれるという感じにはなかなか、やる人もいるんでしょうけど、やらない人もいたりして、そういったときだと例えば文化祭ですね。いろいろな文化とか運動とか、ジャンルによらずと。そうすると、その代表の方が知り合いになったりして、そうすると先ほどのライターの記事に関するところも、その人たちがそれぞれ発信しているわけですから、相乗効果で、ライターさんはライターさんで書くかもしれないですけど、アーティストさんもそれぞれのことを書いたりして、たくさん広がって行くんじゃないかなとちょっと思いました。

【間瀬委員】 ありがとうございます。

そうですね。インフルエンサーのポイントというのは顔があるということだと思んですけど。くにたちNAVIは顔がない形でポータルサイトと名のついているので、それで見てくださいの方もいらっしゃると思うんですけど、インフルエンサーさんというのはその人の顔が見えている。この人だからこそ、その人が発信する情報とか、その人がお勧めする商品だったりとか、イベントとかを見に行きたいみたいなどころもあって。市内に関して言えば、市外にも多少効果はあるんですけど、観光協会は「くににゃん」に力を入れているんです。

「くににゃん」というキャラクターがいるのは御存じですか。あれは市のキャラクターではなく観光協会が商標とか著作権とかを持って管理運営しているんです。でも、市のごみ袋にも載っていたり、市報とかにもいっぱい載っていますけど。「くににゃん」がX、いわゆる旧ツイッターを持っていたりとか、あと「くににゃん」ファンクラブというLINEがあるんです。無料で登録すると。Xはこ

っちから見に行かなければ基本的には……。もちろんフォローしていれば自然と流れてきたりする情報があるんですけど、「くににゃん」は結構見られるんです。面白い情報とかを発信すると結構見られます。それこそふだん、くだらない情報ほど見られます。真面目な情報ほど見られないです。こんなことをやるんですけどという。でも、ふだん、くだらないのでフォローを集めておくことによって、そういう真面目な情報も一定数、割合は減りますけど、見てもらえるんですよ。やっぱりそういう工夫が必要で、ずっと真面目なことしかつぶやいてないと誰もフォローしてくれないんですよ。だから、そうじゃない形で集めておいて、そういうふうにするということですね。

あと、LINEのほうの「くににゃん」ファンクラブというのは、もうすぐ3,000人なんですが、これはSNSに当たるんですけど、実は届くんです。見に行かなくてもいいです。立川ビルボードというのは、あるいはくにたちNAVIというのは見に行かなくちゃいけないんです。自分から気になって、そのホームページを訪れなくちゃいけないんですけど、LINEの公式LINEと言われているものがあるんですけど、お店とかで公式LINEをやると毎月届くような、同じような仕組みで「くににゃん」ファンクラブというのは、「くににゃん」から月1回、町の情報が届くんです。そこは結構真面目な情報しかないんですね。ただ、「くににゃん」に立体「くににゃん」がいるんです。等身大の。それが今度、このイベントに現れますよとかというのはそこで流してあげるんです。イベントに来てもらうんだけど、「くににゃん」に会いたくて来る人がいるんですよ、いっぱい。子供たちも含めて。

だから、インフルエンサーではないんだけど、キャラクターという顔がある存在、愛着が持てる、そういうキャラクターを通しての情報発信と集客みたいなことというのは観光協会は力を入れています。今年もちょっと面白いことをやるんですけど、そういう力を入れて、情報発信をうまく楽しく受け取ってもらおうという工夫はしています。文化芸術情報もいつかそこで発信できるようになりたい。そう思っています。

あと何でしたっけ。もう一個、何かありましたね。2つ目を忘れちゃいました。

【佐藤委員】 文化祭ですね。

【間瀬委員】 国立は、そうですね、何とも言えないですね。市民文化祭みたいなことは公民館とか、芸小とかを使ったりとかもしてやったりしてしまっていて、文化芸術団体同士がというのは、踊りとかであれば、LINKくにたちとか、あと市民祭りのときのステージとかは、交流があるかどうかは置いておいて、それぞれの団体が年に1度の発表、年に2回の発表ということで踊ったり、自分たちの演奏を披露したりとか、ダンスをするというのがあったりするのかなと思います。

そもそもつながりを求めているのかどうかよく分からないところですが、あったらいいんだらうなと思いつつ、本当に求めていたら既にあったりしそうな気がしますしということで。

ただ、横串になるような存在というのは結構重要だなと思っていて、さっきの市民ライターさんとか編集者みたいな形で、個々の活動は自分たちだけでも手いっぱいだったりすることがあるんですけど、その横串になるような存在、あちこちにぐるぐる回る人がいると、今度、こういうのがあるらしいよと情報を運んでくれたりするんですよ。それがつながりのきっかけになったりとか、自分たちだけでは知らない、いろいろなまちの文化芸術の情報なり、イベント機会なり、補助金の情報かもしれないですけど、そのようなことも運んでくれる可能性もあるんじゃないかなというふうには思っているので、市民ライター、編集者の役割は、そういうアーツカウンシルの役割もあるんですけど、そういう部分で期待できる場所があるかもしれません。

【高橋委員】 ちょっとインフルエンサーについて、私、自分の仕事の関係の業界に特化したイン

フルエンサーさんの集合体みたいなところと付き合いというか、仕事上の付き合いがあるんですけども、インフルエンサーは自分のサイトへのアクセスとかフォロワーを増やすのが最大の目的であって、これに協力して、どれだけ自分にメリットがあるかなというのを考える方たちだと思うんで、あまり期待できないかなというのが僕の印象というか。もうちょっと自分のために動く人たちかなという印象が若干強くて、偏見かもしれませんが、そういう意味では、あまり期待できないような印象があります。

【宇治議長】 ありがとうございます。どうぞ。

【事務局】 佐藤委員の御質問の御参考までのコメントですけども、立川ビルボードのヒアリングの中でお話が出ていたのが、資料2-2の3ページ目の中ほどに述べていただいていたんですけども、立川文化芸術のまちづくり協議会の企画運営委員会の事業として「立川まちづくりダイアログ」という事業を令和5年から始めているというお話がありました。これはもともと協議会に参加されている団体間の連携強化ということを目的として対話の事業をやっているということです。こちらにいろいろな団体が御参加されることで団体間の交流ですとか、今、まさに佐藤委員がおっしゃったような横のつながりづくりということになっているというお話がありましたので、これは直接的に情報発信ということではないかもしれませんが、ここに載っている連携強化事業もお隣の立川市さんですと行われているという話がありましたので、このあたりもまた今の御議論に対して何か今後の参考になるのかなと思った次第です。

【宇治議長】 ありがとうございます。長島委員、どうぞ。

【長島委員】 皆さんの御意見を伺って、一日も早くこれが実現できたら素晴らしいのですが、もし高木さんがいなかったら立川ではこうは上手く行かなかったのかなと思いました。ですから、国立でやる場合も、メンバーによって随分違ってくるでしょうし、高木さんがいなかったら、もしかしたら立川でもまだ運営できていないかもしれない。

一つ素朴な質問をさせていただきます。立川を例に挙げられたのは、隣の町だし、交流があるということで例に取られたのでしょうか、東京にはいろいろなところで、こういうことをなさっている市町村もあると思います。その辺はいろいろ見られた中で立川をモデルにされたのでしょうか。それともお隣の市だからという理由からでしょうか。

【間瀬委員】 この文化芸術推進会議のメンバーになった当初から、情報発信の一元化のことに關しては調べていて、出てくるのは結構全然違う。日本の中のほかのどこかの都道府県の何とか市でやっていることかあったんです。アーティストバンクをサイトでやっているところがあったりとか、いろいろあるんですけど、よく芸術祭みたいなのをやっているような市とかもあったりするじゃないですか。瀬戸内とか、いろいろなところで。越後のほうとかでもやっていらっしゃいますけど。そういうところとかも見たんですけど、いいなというのはそんなになかったんです。ちょっと古いとか、やり方がちょっと時代遅れだなというのがあったりしている中で、立川ビルボードのことは知っていたような気がするんですけど、あまり灯台下暗しで見てなかったんですけど、この推進会議の中で話していて、要件とか条件とか、いろいろ考えていく中で、どうやって皆さんに説明しようかと悩んだんです。分かりやすい先行事例やサンプルを探す中で、それこそ灯台下暗しで、立川ビルボードを調べたら自分の言っていることとかなり合致していると。それがたまたま隣だし、よかったなというふうに。これが別に2つ隣、3つ隣ぐらいでも紹介していたと思うんですけど、本当に真横だったというところでした。

高木さんは顔を知っていたぐらいです。本当に全然つながりはなかったんですけどという感じなので、そういうつながりの中でというよりは、本当に検索してと。

【長島委員】 たまたま隣だったということですね。

【間瀬委員】 それと、それが自分が考えているものの形だったと。

【長島委員】 それが立川の例がぴったりと。

【間瀬委員】 そうです。モデルとして、ほかにもあるんだけど、ちょっと違うな、古いなどというのがあったので、かなりいい線を行ってやっているなというのが隣にあったと。偶然です。

【長島委員】 なぜお聞きしたかという、高木さんという方がおられたということが一番大きかったのではないかと。ほかの町、例えば国分寺でもどこでもいいんですけど、その中でそういう方が見つかったら面白いです。見つかってほしいという願いもあるんですけど、ほかの例として、そういう方がおられるのかを知りたかったということです。

国立でやろうとしたことをすでに立川で似たようなことを行っていたわけですね。

【間瀬委員】 そうですね、はい。そのとおりに全く同じことをやる必要はないんですが、市民ライターは誰でもいいわけじゃなくて、むしろ選抜したほうがいいんじゃないかと、そういうような違いも出てくると思います。

【長島委員】 今お話を伺っていて、やはりメンバーが大切ですね。そういう方をどうやって探していくのか、この委員会の中にももちろんすばらしい方が多くいらっしゃるのだからここから選んでも良い。先ほど職員の方がおっしゃったように、メンバーの中から選ぶのが理想的で、候補に誰かいますか？というふうにしたのではなかったのが立川のケースだったわけですね。ですからそういうメンバーや市民ライターを国立市民の中から探すということになったときに、本当に高木さんのような方が国立市から見つかるのか、或いは国立市以外に住んでおられる方など広い範囲で探すのか。具体的に少しでも早く進めていけたら良いと思うのですが、間瀬さんはどのようにお考えなのかをお伺いしたいです。内容的にはとてもすばらしいので、是非それを早く実現できたら良いなと思います。

【間瀬委員】 私に振られたと思っているので私が答えますけど。

実現していくためには何をしたらいいかということに関してヒアリングなどを行ったのは、結局のところ、解像度を上げるということだと思うんです。何と何をそろえればできるのかということの解像度、区分けです。僕の中で今大きくは4つあると思っています。

一つは、今お話しされた実際に動き出したときの現場を仕切れるだけの取りまとめをできるだけ能力を持った編集者的な存在としての個人。これは1人なのか、1.5人なのか、2人なのかというのはあるかもしれませんが、恐らく少人数で、砂連尾委員の言うところの一種視点を持った編集長として、こういう戦略でやっていったら、こういうコンテンツの選び方だったりしたら、より多くの人たちに見てもらい、より深く知ってもらえるんじゃないかという効果的なことを考えられる。そういう高木さんのような言い方をしていますけど、プロパー人材というものが重要です。

人材に求められる要件、例えば市内に住んでいるとか、国立に近いところに働いていたり住んでいるとか、編集能力を持っている。ウェブに強くなければいけない。お金が出せない場合はお金がなくてもある程度のことをやってくれる可能性があるモチベーションを持っている人とか、そういう要件づくりというのが必要になってきて、その解像度をより高めていくということですね。

次が分かりやすいところでお金です。お金が幾ら必要なのかというのは若干解像度が上がってきたんですけど、何をどこまでやるか、記事の本数を何本にするかによって変わってくるでしょう。市民

ライターにどれぐらい手当を出すのかことによっても変わってくると思います。国立に合った形があるでしょう。そして、このお金が幾らかかるのか。そして、お金をどう集めるのか。市から出してもらうのか、それ以外の形も含めて調達するののかというところの問題、これが2つ目です。

3つ目が、先ほど言った個人だけでは何ともならない部分がある。ある程度のつながりの中で情報が入ってきたり、連携するからこそ、発信者に対しての何とかビルボードはどこがやっているのと聞いたときに、そういうところはちゃんとやっているのねとなっているから、市民ライターも応募がかかってくるし、個人がどうしても権力を持ってしまうと、いろいろいざこざが起きてしまうので、恐らく先ほどのプロパー人材とは別に後ろ盾となるような組織的なものは必要だろうと。実質、その人がやっていたとしても。実質、その人がやっていたとしても、何らかの公平性だったり、多様性だったりというものを確保するような、アートもいろいろな種類があるので、一人だけでは多分賄えない部分を補う後ろ盾となる組織。これもどういう要件が必要なのか、どういうふうにしたらいいのかということを考えて詰めていく必要があるだろうなというところがあります。

始まった後の問題というのは、その人、金、組織の問題なんですけど、まずホームページをつくる。さっき言ったデータが一石二鳥で届くみたいなこと、これは実は技術が必要なんです。ホームページ制作とかの部分の技術。これはお金があれば何とかなると思っているんですけど、ただ、どこに頼むか。できれば市内の業者に頼みたいんですけど、国立はあまりITは弱いんですよ。知らないだけかもしれないけど。だから、なるべく本当は外にお金を出してつくりたくないですけど、個人的には。でも、それが必要かもしれない。なので、ホームページのテクノロジーの部分で、それを自分たちがこうしたいという、効率よくSNSとかと連携したり、イベント情報をインプットできたり、一石二鳥にできるようなものをつくり上げるホームページの業者さんを見つけなきゃいけないだろうなと。それはもちろんお金が関わってくるんですけどというところの4つかなと思っています。

で、今の高木さんのような人材というのも大きな課題なんですけど、その部分を今のように切り分けていき、どういう条件・要件が必要なのかということを見ると、もしかしたらそれで探したり、こういうのはないですかとやれば、何もない中で言っても分からないので、これだったらいるよとか、こういう組織があるよとかとやれるんじゃないのということが言えると思うので、それを最終報告までに一段と解像度を上げていくというのが、一旦、今期の、中途半端かもしれないけど、役割なんじゃないかなと思っています。それがあれば話が持っていけるんじゃないかというふうに考えています。

【長島委員】 ありがとうございます。早く進められたら良いと思ったものですから。

【間瀬委員】 急がば回れかもしれません。ゆっくりやりましょう。

【宇治議長】 ありがとうございました。

皆様の御意見を頂戴いたしまして、また分科会のほうで御検討のほど、よろしく願いいたします。

最後に私のほうは多摩市美術館で実際にこのビルボードのサービスを受けていまして、市民ライターの方が毎回、内覧会とかトークイベントとかに必ず取材に来てくれます。それも同じ方がかなり熱心にやっけていただいていますので、財団として私どもとしても大変助かっていますので、ぜひこういったサービスを国立のほうでも確立していければなど強く思っております。以上でございます。

それでは、これもちまして第22回文化芸術推進会議を終了いたします。

本日はどうもありがとうございました。